地域生活を支える
社会福祉法人
第266回

社会福祉法人 太陽の里福祉会[栃木県那須塩原市]の試み



さまざまな縁を力に、廃校を利用した「食×アート×福祉」が融合するカフェでまちを活性化し、福祉の可能性をひらく

地域の企業や経営者と協力し、廃校を活用したカフェレストラン・ギャラリーを開設。観光客が訪れる人気スポットに育て、障がいがある方がたの働く場を生み出すとともに、アートを活用したまちづくりに取り組む。

太陽の里福祉会

法人名
社会福祉法人 太陽の里福祉会

本部住所
栃木県那須塩原市上中野53

URL
https://taiyounosato.net/

理事長
松本 一伸



事業内容
- 障害者支援施設
- 多機能型事業所生活支援センター
- 就労継続支援事業
- 共同生活援助事業
- 相談支援事業
- 保育所事業
- 一時預かり事業
- 地域子育て支援拠点事業
- 放課後児童健全育成事業





20名定員の就労継続支援B型「北風と太陽」。カフェレストランとギャラリーとして運営している。地域住民や観光客、近隣の事業所など、多彩なつながりが生まれている場所。



「地域に開かれた施設」を基本理念の一つに掲げ、収穫祭や地域のボランティアを招いたそば打ち体験など、多彩な行事を通じて、ご利用者と地域の人びとが自然に交流できる機会をつくっている。

社会福祉法人 太陽の里福祉会の沿革

昭和後期、東京で歯科医として働いていた創設者が、故郷に貢献したいという思いを強くし、出身地である那須塩原市に帰郷する。昭和59年に社会福祉法人太陽の里福祉会を設立するとともに、知的障害者更生施設「太陽の里」を開設。

地域のニーズに応える経営を継続し、平成元年にショートステイ、平成9年にデイサービスセンター、平成11年にグループホームを順次展開し、広域からご利用者が集まるようになった。現在は障害者支援施設「太陽」に法人本部を置き、市内唯一の障害者入所施設として地域福祉に貢献している。

近年は児童分野にも事業を拡げ、平成22年に「コメット保育園」を開設。その後、学童保育所「ゆめみらい」「ゆめみらいツー」を開設するなど事業を展開している。平成31年には、旧戸田小学校を活用した就労継続支援事業所「北風と太陽」を開設した。

社会福祉法人 太陽の里福祉会の基本理念と目的

[理念]
「利用者の権利擁護」
「利用者中心のサービス」
「地域に開かれた施設」

[目的]
社会福祉事業の主たる担い手としてふさわしい事業を確実・効果的かつ適正に行うため、自主的にその経営基盤の強化を図るとともに、その提供する福祉サービスの質の向上ならびに事業経営の透明性の確保を図り、総合的な福祉の推進に努める。

太陽の里福祉会では、3つの理念を事業の指針とし、朝礼で全職員が唱和している。3つの理念は円を描くようにつながっていると考え、その方がどんな生活をしたいのか、何を大切にして生きてこられたのかを考え、「方法」ではなく「目的」からどのようなサービスが必要かを考えることを大切にしている。

また、「地域に開かれた」とは、単にイベントを開催したり、近隣の方を施設へ招いたりすることだけではなく、ご利用者・住民・企業・行政がともにまちをつくり、日常的に顔を合わせる関係を築くことをめざしている。ご利用者を中心に考えれば、施設に入所していても地域社会の一員であることに変わりはなく、まちづくりへの貢献は法人にとって当然の使命だと考えている。

北風と太陽 インスタグラム

太陽の里
福祉会
の試み
Case 1

古い木造校舎にアートが並ぶカフェレストラン「北風と太陽」



ギャラリースペースでは、月ごとに展示を入れ替えている。松本統括施設長自ら作家を探し、訪れるたびに違う作品を楽しむことができるように企画している。

市町村合併によって広い市域をもつ那須塩原市には、酪農地や温泉地が点在し、地域ごとに特色ある暮らしが営まれている。新幹線で東京と結ばれる利便性を活かし、観光客や移住者の姿も見られる。そのようななかで若い旅行者からも関心を集めているのが、廃校の面影を残しながら食とアートが楽しめるB型事業所のカフェレストラン「北風と太陽」だ。

事業開始に当たり、ターニングポイントとなる出会いがあった。開所のきっかけは、栃木銀行の支店長から、廃校となった旧戸田小学校を活用したカフェ事業を提案されたこと。「卒業生、保護者、働いていた教職員など、関係者がたくさんいることに可能性を感じました」と松本 和重統括施設長は振り返る。

もう一つの転機は、事業のコンセプトづくりの場面で訪れた。那須塩原市は「アートを活かしたまちづくり」に取り組んでおり、板室温泉大黒屋では、アーティストの作品を展示するなど、温泉とアートを組み合わせた取組を展開している。太陽の里福祉会では、大黒屋の会長・室井 俊二氏から、経営やアートを学ぶなかで、「北風と太陽」は「食をきっかけに気軽に訪れることができ、アートや気づきを楽しめる場所」をめざすことになった。

しかし、開設に至るまでにはいくつかの課題に直面した。現代の耐火基準を満たすためには大がかりな防火壁の設置が求められる一方、古い建物のため図面が残っておらず、水道の配管なども難航。着工に至るまでに3年半の月日がかかった。

また、行政の建物を活用して事業を行うことについて、地域の方がたに不安や疑問を抱かれないよう、事前に説明会を開催した。社会福祉法人が非営利法人であることや、学校として親しまれてきた建物の面影をできる限り残して活用することなどをていねいに説明。その結果、地域の方がたからは「自分たちの母校を残してくれてありがとう」という言葉も寄せられるようになった。

「北風と太陽」という事業所名は、有名なイソップ寓話に由来する。「もし旅人の帽子を脱がせる勝負であれば北風が勝っていたはず。目的が変われば方法は常に変わります。例えばご利用者の散歩も、運動や気分転換、機能訓練など目的はさまざまです。それを『時間だから』と一律に職員が連れて歩くことへの疑問がずっとありました。人の数だけ違った表現方法があるアートの世界との出会いは大きなものでした」（松本統括施設長）。



学校だった頃の懐かしい面影を可能な限り残し、大きな窓と広々とした空間でゆったりと食事やお茶を楽しむことができる。

太陽の里
福祉会
の試み
Case 2

あえて福祉をアピールしない訪れた人に「気づき」を促す仕掛け



「北風と太陽」で提供する数量限定の「和っぷれーと」。季節に合わせて献立が変わる人気メニュー。

「北風と太陽」では、社会福祉法人が運営していることをあえて大きく掲げていない。最後まで福祉施設だと気づかず帰る人もいる。地域の方がたや観光客に親しまれており、旬の地産食材を使ったランチメニューや、パティシエが手づくりするスイーツが好評だ。開設時には、就労継続支援B型事業所で本格的なレストラン運営ができるのかと心配する声もあった。しかし、松本統括施設長には、「全員が一から十までできなくてもいい。得意を活かして分業すればうまくいく」という信念があった。実際、接客、会計、盛りつけ、テーブルセッティング、皿洗い、掃除など、多岐にわたる作業をご利用者が分業している。さらに手芸作品をつくって販売する人や、レストランで飼育しているヤギの世話をする人もいる。

ご利用者による接客は不慣れな面もあるが、福祉施設であることを知る人も、知らない人も、あたたかく見守る雰囲気があるという。この場所をきっかけに、それぞれが心のなかで描く「障がい者像」が変化することを期待している。また、お客さまから直接「ありがとう」と言われる経験は、ご利用者の働きがいになっている。

古い木造校舎に対する感想が、年代によって異なるのも興味深いポイントだ。校長職を経験されたご年配の方が懐かしむ一方、若い家族は「おしゃれ」「かわいい」と新鮮な気持ちで楽しんでいる。廃校利活用に興味のある大学生がSNSを見て来店し、卒業論文の題材にしたいと東京から通ってくれたこともあった。

併設するアートギャラリーでは、訪れた人が楽しめるよう、地域で活動する作家や、若手の作家を中心に、月ごとに作品を入れ替える。ご利用者や保育園児の作品を展示する月もあり、法人の創作発表の場になっている。

障がい者福祉は一般の方には馴染みが薄い。アートも、接点がない人には縁遠い世界かもしれない。ここでは、食事に来たら接客をしているのは障がいがある方だった、飾られている作品を見たら現代アートだったというように、意識しなくても知らなかった世界に出会える。そうした場をつくることでさまざまな人がまじりあい、自然と認め合う地域づくりをめざしている。





厨房での調理や盛り付けを担当する方、料理の配膳を担当する方など、それぞれが自分に合った仕事を担い、カフェレストランの運営を支えている。

太陽の里
福祉会
の試み
Case 3

横のつながりをつくる 校庭で開催する 福祉事業所マルシェ



今年度2回目となる「サンサンマルシェ」は、初めて土曜日に開催。より多くの地域住民が来場し、福祉事業所の取組を知ってもらう機会となった。

昨年から、カフェレストランの広いグラウンドを利用して、福祉事業所が集まるマルシェをはじめた。市内だけでなく近隣市町の事業所からの参加もあり、食べ物やハンドメイド作品などの自主製品を販売している。

民間企業にも声をかけ、キッチンカーも出店。集客力や営業力に長けた民間企業の参加は、PRに不慣れな福祉事業所にとって頼もしい援軍となる。そうしたときも「北風と太陽」の存在が大きいと松本統括施設長は話す。いままで福祉と接点がなかった方でも、「北風と太陽」の名前を出すと話が進む。行政とのかかわりも、これまでは主に保健福祉部のみだったが、企画政策課、ツーリズム推進課、農務畜産課、サーキュラーエコノミー課などに広がり、企業からコラボレーションの声がかかることも増えた。

「目的は福祉を知ってもらうことですが、その手段はレストランであれアートであれ、無数の入口があると思います。『北風と太陽』がきっかけとして機能し、声をかけていただけていることも多く、これからも可能性は広がると期待しています」と松本統括施設長は言う。

そして、マルシェの最大の成果は、出店者と来場者、出店者同士などの横のつながりが生まれたこと。ご利用者にとっては外出の機会になるとともに、他の事業所がどのような製品をつくっているのか情報交換ができる。マルシェには、特別支援学校の関係者も訪れるので、教員にとっては、多くの福祉事業所に一度に声をかけることができる場となりよろこばれている。さらに、企業が福祉事業所の自主製品を見つけて、自社ノベルティづくりを依頼するという縁が生まれたこともある。

当初は、平日開催だったが、一般の来場者から休日開催を希望する声が上がったことから、今年は9月の土曜日に今年度2回目となるマルシェを開催し、予想を上回る盛況となった。継続していくことで出展してくれた福祉事業所や企業の利益になることを期待している。





「北風と太陽」の校庭を活用して開催した「サンサンマルシェ」の様子。市内外の障害福祉事業所による自主製品のほか、地域の方がたによる飲食物や手工芸品などが並び、多くの人が行き交う交流の場となった。

太陽の里
福祉会
の試み
Case 4

地域に根差した 関係が育む 地元企業との連携



太陽の里福祉会とブリヂストン栃木工場が共同で実施する避難訓練の様子。緊急時に備え、それぞれの役割や避難の流れを確認しながら、支え合える体制づくりを進めている。

太陽の里福祉会は、25年以上前から、毎年秋に法人祭りを開催し、地域の方がたと交流を深めてきた。祭りには職員や保護者会も屋台を出し、地域で活動する個人や団体がバンド演奏などを披露する。抽選会や花火の打ち上げも好評で、季節の恒例行事として定着している。参加者は毎年のように顔を合わせる間柄となり、ご利用者への理解も深まっていると実感している。

こうした地域との信頼関係は、地元企業との連携にもつながっていく。障害者支援施設「太陽」を中心とする法人敷地は、フェンス1枚を隔ててブリヂストン栃木工場と隣接している。同工場は過去の大規模火災を契機に、地域への恩返しをしたいという思いを強くもっていた。法人から声をかけたことをきっかけに、ブリヂストン社員が法人祭りでかき氷や金魚すくいなどの屋台を出店し、その売上を法人に寄附する取組がはじまった。その後も、工場内のビオトープを法人の保育園児が訪ねたり、保育園行事に招待するなど、継続的な交流を重ねてきた。

さらに、災害時に工場敷地に避難できないかと相談すると、フェンスの一部を開け、出入口を設けてくれた。以来、総合防災訓練で出入口を使う練習をしたり、工場が所有する消防設備で放水訓練を行ったりするなど、防災面での連携も深まった。地震発生時にはブリヂストン社員が施設入所者の避難・救助を支援することを想定し、民間企業と社会福祉法人の垣根を越えた避難訓練を実施するまでに至っている。

地元で活躍するさまざまな人たちとの縁を大切に育み、ともに地域課題に向き合ってきた太陽の里福祉会。その積み重ねは、観光、廃校資源の再生、芸術振興、防災など、地域全体へと広がっている。その意義を松本統括施設長はこう語る。「広い視野で、さまざまな人とかかわり続けることで、新たなつながりが生まれます。地域がよくなれば、おのずと福祉もよくなる。その実感が、次の挑戦につながっています」。

法人を中心に地域のなかにさまざまな縁が生まれ、地域が活性化することで、障がいに対する理解が進み、障がいがある方がたが活躍できる社会づくりにつながっている。



地域の方がたにも親しまれる祭りをともに盛り上げ、日頃から顔の見える関係づくりにつなげている。



コメット保育園の園児たちがブリヂストン栃木工場内のビオトープを訪れ、蛍の放流を体験。